

令和5年度ひきこもり対策連絡調整会議議事要旨

日 時：令和6年2月29日（木） 15時～16時40分
場 所：福岡県精神保健福祉センター 研修室

1 開会

2 議事

(1) 福岡県のひきこもり対策について

アからオについて資料に沿って説明

ア 福岡県のひきこもり対策について

福岡県保健医療介護部健康増進課こころの健康づくり推進室
(資料1)

イ 福岡県ひきこもり地域支援センターの取組について

福岡県精神保健福祉センター社会復帰課
(資料2)

ウ 福岡県若者自立相談窓口におけるひきこもり支援の取組について

福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局青少年育成課
福岡県若者自立相談窓口
(資料3)

エ 就職氷河期世代活躍支援におけるひきこもり支援の取組について

福岡県福祉労働部労働局労働政策課
(資料4) パンフレット「就職氷河期世代活躍支援事例集」、「メタバース活用長期無業者就労支援事業チラシ」「就労サポートマップ」)

オ 自立相談支援機関におけるひきこもり支援の取組について

福岡県福祉労働部保護・援護課
(資料5)

<質疑応答>

○A 委員：

- ・資料1について、市町村プラットフォームの設置を進めているが、プラットフォームを設置、運営したことでの効果、好事例などはあるか。

○事務局：

- ・市町村プラットフォームの設置の把握はこころの健康づくり推進室で行っているが、その効果や具体的な運営等の確認までは至っていない状況である。市町村の具体的な取組状況等については、今後把握する必要があると考えている。
- ・保健所圏域では、ひきこもり支援者等地域ネットワーク会議を地域プラットフォームと位置付けて、9保健所圏域で開催している。今年度は地域の実情を把握している保健所との協力体制を強化し取り組んだ。地域の多機関が参加しており、「事例検討のグループワークを通してお互いに各機関について理解を深め、顔の見える・相談し合える関係づくりができた」、「支援の経験がない支援者においては、支援方法や連携先を学ぶ機会となった」というアンケート結果が出ている。実際にその後の支援に役立ったという声もいただいております。地域のネットワークづくりや、支援者の資質向上において効果的な取組だと考えている。保健所圏域によって市町村の参加状況に差があることが課題であり、今後市町村におけるひきこもり支援の取組を進めていく上では、市町村の参加を促すことが必要だと考えている。

○会長：

- ・資料2について、ひきこもりサポーターの活用が進んでいないという説明があったが、サポーター

一はどのような場で活用することを想定しているのか。福岡県立大学不登校・ひきこもりサポートセンターでは、大学生のボランティアが活躍している。ひきこもりサポーターが実際に活動するには難しさがあるのかもしれないが、地域の居場所などで一緒に過ごすといった活動から始めると、ひきこもりサポーターも徐々に慣れて活動の場が広がるのではないか。

○事務局：

- ・ひきこもりサポーターは市町村の相談や居場所をサポートする人材を育成することを目的に養成しており、市町村からの派遣依頼があった場合、登録者を紹介するもの。現在のところ市町村からの派遣依頼がないため、活用されていない状況である。ひきこもりサポーターは経験者やご家族等が登録されており、実体験を踏まえた支援ができるため、市町村等での活用がなされるよう今後も市町村への説明等に努めたい。

○副会長：

- ・資料3について、ひきこもりが長期化しないよう早期にアプローチし、ひきこもり状態にある本人の困りごとを明確にして、相談機関等を紹介する支援すると説明があったが、具体的にどのようなことをしているのか。

○福岡県若者自立相談窓口：

- ・学校側に若者相談支援窓口の情報提供し、不登校になった時点で相談に応じたり、学校を卒業又は退学するがその後の進学先が決まっていない場合に、社会と関係が途切れることがないようにしている。
- ・不登校の方の家族からは、学校にも相談しつつ若者自立相談窓口にも相談しているというケースが多い。学校に戻らないとしたらどのような進路があるか相談できる場所として相談に応じている。学校を卒業又は退学するが、その後の進学先等が決まっていない方は、学校のスクールソーシャルワーカーからの引継ぎで相談に繋がるケースが多い。
- ・本人が相談に来た場合、本人の思いを聞くと「社会が怖い」、「どうしたら良いか分からない」と漠然としていることが多いが、じっくり話を聞くと「何かしないといけない」という思いがある。本人の希望が学校であれば、進学先などについての情報提供し、仕事であれば地域の若者サポートステーションに繋ぐなどの支援をしている。
- ・家族としては「働かせたい」、「進学させたい」、「何かさせたい」と思って相談に来るが、本人に気持ちを聞くと「まだ何もしたくない」など、本人と家族の気持ちに食い違いがある場合がある。相談員が間に入って相談を続ける中で、本人、家族の方向性が見えた時に、希望にあった繋ぎ先を紹介する支援をしている。

(2) 意見交換

○B委員：

- ・家族会である福岡「楠の会」では家族の力を取り戻すことはできるが、一歩進んで本人・家族を支援するには支援機関の力も必要である。福岡「楠の会」と支援機関の両輪で本人・家族支援が進むと思う。
- ・支援機関によっては「家族や本人から支援の希望がない」という声があるが、「希望がない」のではなく「分からない」が正しい。家族にとって支援機関は敷居が高く、相談できない家族が多いということに目を向けていただきたい。福岡「楠の会」では県内6か所で集会をしているが、今まで支援者が来てくれたことはほとんどない。家族と支援機関を繋げるための接点となるような機会を設けていただきたい。一家族でも支援機関に繋がったらそれがモデルとなり、他の家族にも広がると思う。
- ・また、家族も当事者であり、家族がやっとの思いで支援機関に相談に来たら、まずは「よく相談に来てくれた」という思いで十分に話を聞いて接して欲しい。そこからでしか相談や支援は始まらない。

○A 委員：

- ・ひきこもり状態であった子どもに対して、その子の困りごとに対する繋がり先の一覧を作ったことがある。その繋がり先の一覧を見て、子どもは元気になって外に出るようになった。自分にはこれだけの支えてくれる人や、支援機関があることを可視化できたことが安心感や活動するエネルギーに繋がったのだと思う。
- ・提案だが、例えばスマホやパソコン、メタバースを活用してチェックリストをつくり、自分が不安を感じる項目にチェックを入れると、支援機関の場所や連絡先の一覧が出てくる仕組みがあると良いのではないか。本人は外に行けないが、家の今座っているところから、自分を支える支援機関やそのネットワークを具体的に可視化できたり、繋がる仕組みが分かるだけでも本人や家族にとって大きな力になる。

○C 委員：

- ・ひきこもり支援に関するさまざまな制度や取り組みが広がっているが、それでも支援が届かない、支援機関に繋がらない人たちがいるのが現状。家庭内のことは支援機関など外に相談しにくいものであるし、そこへ支援者が踏み込むことへの侵襲もある。また、本人は自分のことで親が苦しんでいることを自分を責める材料にしている。本人や家族から相談がないからどうしようもないではなく、ひきこもっている、不安を抱えながらも社会に参加できるきっかけを地域社会の側から誘い掛けるという視点が今後の社会のありようとして必要ではないか。
- ・地域の民生委員に声掛けの仕方を伝えて、民生委員からちょっとした声掛けをしてもらったことが外に繋がるきっかけになる場合もある。また、北九州市では7年前から協力いただけるところを地域に募って、本人・家族が外に繋がるきっかけづくりに取り組んでいる。例えば、サッカーチームのギラヴァンツと連携して、ギラヴァンツの観戦講座の誘い掛けを民生委員から家族にってもらうなど。不安を抱えていて、ひきこもっている今の状態でも、社会に参加できるという実感を本人・家族に得てもらうきっかけになればと考えている。

○D 委員：

- ・家族だけが相談に来ており、本人と家族の思いのずれや関係性に隔たりがある場合は、支援が難しいと感じる。ただその場合でも、家族自身の気持ちを回復させていく支援をすることで、家族の気持ちが軽くなり、本人に改めて向き合えるようになるなど本人支援に繋がる効果があると考えている。
- ・まずは相談に来た方の話をじっくり聞き、その方に今必要なことは何かを考えて、一緒に解決していくといった寄り添った支援を心がけている。
- ・A 委員が話された、「支援者一覧」を作成して本人に渡してはどうかとご家族に提案したことがある。本人が安心感を得られることはとても大事なことだと思う。いいお話を聞かせていただきました。

○E 委員：

- ・ひきこもり支援で利用できるものとして、訪問看護がある。訪問看護は医療機関受診が必要であるが、医師の指示のもと、看護師が訪問し、一緒に過ごしたり外出に付き添ってもらえるなどのことができるので、利用できる方には紹介していただきたい。
- ・また、ひきこもり回復者の話や姿を見せることも大事な支援だと考えている。ひきこもり回復者に今何をしているのか、どうやって回復したのか、何が役立ったのかなどインタビューをするユーチューブ動画を本人達に手伝ってもらって作成したい。「現実には過去がつくるのではなく未来がつくる」という言葉がある。どうなりたい、何をしたいといったイメージできれば実現に繋がるので未来のことを語ることをしたい。

○F 委員

- ・資料1の県の「ひきこもり支援の基本的な考え方」で、「誰ひとり取り残されない」とあるが、居場所等への交通手段がなかったり、雰囲気合わず行ける場所がない場合がある。本人が地域の居場所等の選択をたくさんできるということが大切であり、例えば、障害者総合支援法の地域活動支援センターが合うと思う小学生がいたら、そこに学習支援に来てもらい学校に登校したとみなすなど。「誰ひとり取り残されない」という目標には「ひきこもりにならない学校づくり」という視点が必要ではなか。
- ・また、県の「ひきこもり支援の基本的な考え方」で、「自分にあった方法で人と人とのつながりが実感できる」とあるが、居場所では、参加する人に合った活動内容を考えることが大事ではないか。例えば、私のところでは地域活動支援センターと社会福祉協議会でeスポーツチームを作り、地域のイベントの一角でeスポーツ大会を実施した。ゲームが好きな不登校や、学校中退、就職がうまくいかずひきこもっている人などが集まり、企画から当日の運営まで一緒に取り組んだ。大会当日は一日中参加者が途切れず疲れたと思うが、次もやりたいという声が聞かれ第2回目も全員来てくれた。誰かに必要とされたり、役に立ったという手ごたえを得たのだと思う。居場所というハード面を作るだけでなく、来てくれそうな、また来てくれた人に合わせて活動内容を柔軟に変えるというソフト面の発想が必要だと思う。

○OG委員

- ・若者サポートステーションなど支援機関は本人・家族にとってハードルが高いと思うが、「ふくおかバーチャルさぼーとROOM」を利用して、アバターを使った楽しい体験や交流会、個別相談をしたのちに、若者サポートステーションの利用に繋がり、就職した人もいる。ゲームが得意な人たちも多いと思うので、そのような人には、ぜひ「ふくおかバーチャルさぼーとROOM」をご活用いただきたい。

○副会長

- ・多様なひきこもり方があり、相談先や居場所で相談したり活動する以外にも、外に出られない人にとっては自分の中に居場所をつくるということがあって良いと思う。九州大学大学院医学研究院の加藤隆弘准教授の「逃げるが勝ちの心得」という著書で「ひきこもる能力」も重要だと書かれてあったので紹介する。

○会長

- ・ここ数年参加しているが、メタバースやオンラインの取り組みなど年々参加機関の取組が充実していることを知ることができた。ただ支援のハード面だけでなく、福岡「楠の会」からの御意見のように、本人、家族、支援者が一緒になって取り組むということを意識して行う必要があると感じた。

4 閉会